

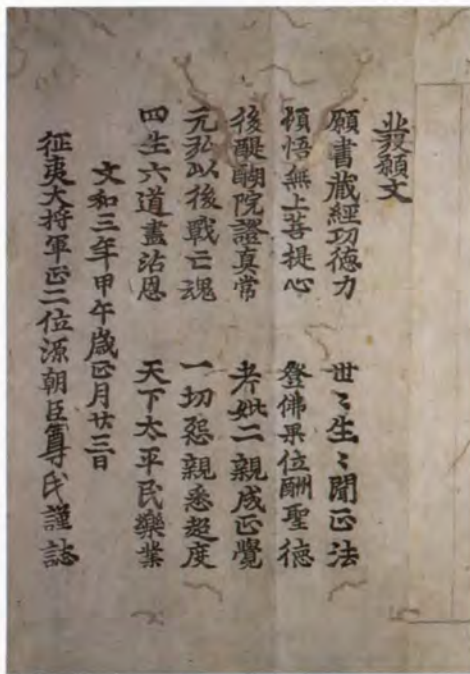
# 大津 歴博 だより

2002  
No.45

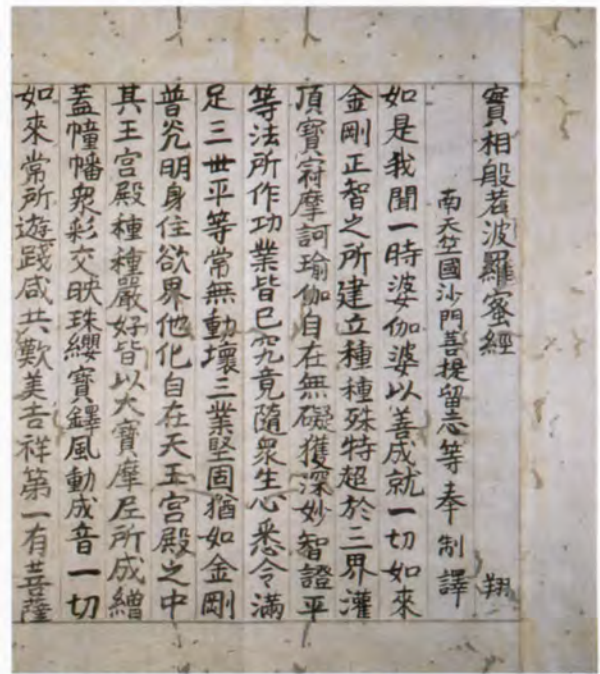
企画展

## — 南北朝内乱と大津 —

2月26日(火)～3月24日(日)



卷末



卷首

重要文化財「紙本墨書大藏經」の内、足利尊氏自筆写経 園城寺蔵 (写真 同寺提供)

室町幕府初代將軍の足利尊氏が、文和3年(1354)12月23日の母の13回忌に際して、両親並びに醍醐天皇ら元弘以後の内乱の戦没者追善のために、同年正月23日発願。京都・近江・奈良・鎌倉の諸寺に命じて書写させ、12月23日足利氏の菩提寺の等持院で供養・奉納されたが、園城寺の要請により全巻同寺に寄進されたもの。写真は、尊氏自筆写経の巻首と巻末の発願文。発願文は木版刷りで全巻に付され、「尊氏」と自筆署名(左端)している。



大津市歴史博物館

## 企画展

# —南北朝内乱と大津—

南北朝時代（一三三一〜九二）は、南朝（吉野）と北朝（京都）の二つの朝廷が並立して政権を争った、内乱の時代でした。後醍醐天皇は、天皇親政をめざして鎌倉幕府を倒し、建武新政を進めました。しかし、その政策に反発した足利尊氏が、北朝の天皇を奉じて室町幕府を開き、各地の武士たちは南北朝に分かれて、全国的な戦乱となったのでした。

戦いは、主として京都の争奪をめぐって展開され、隣接する大津はながくその戦場となりました。延暦寺（後醍醐天皇方）と園城寺（足利尊氏方）という経済・軍事を備えた大寺院が、両朝の軍事拠点の一つとなったからです。本展は、この内乱を描いた軍記物語『太平記』や大津・近江の寺社に残る古文書等、国宝一件・重要文化財三件を含む約四〇点の資料により、内乱期の大津・近江の歴史を明らかにしようとするものです。

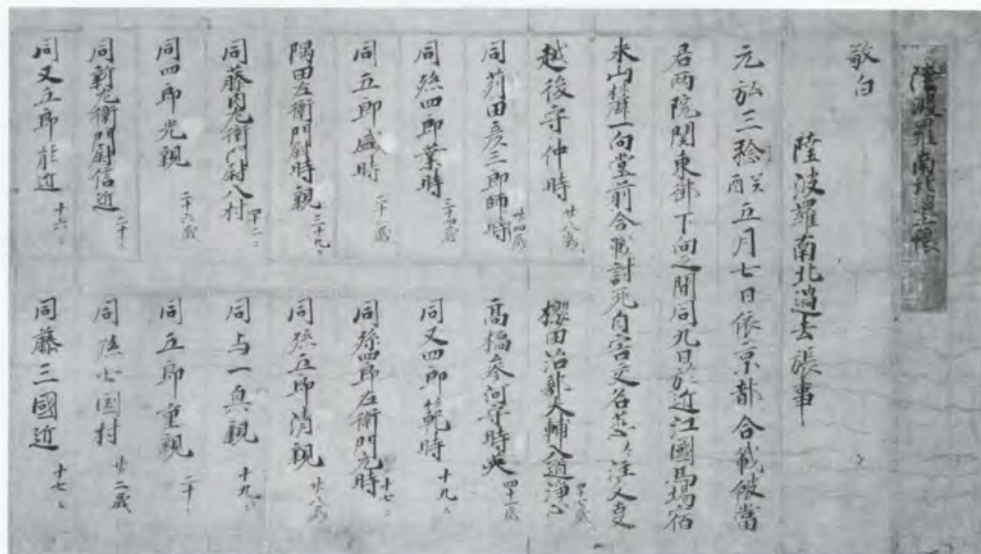
主な展示資料を紹介しますと、まず『太平記』は、今川義元の父・氏親の所蔵本を武田信玄の父・信懸が書写させたという「今川家本」。永正二年（一五〇五）書写で、現存

最古の写本です。また、「陸波羅南北過去帳」は、鎌倉幕府のもとで京都を支配していた六波羅探題の北条仲時ら四三〇余人が、足利尊氏軍に追われて近江国番場（米原町）で自刃した悲劇、鎌倉幕府滅亡の歴史のひとつを生き々しく伝える資料です。

このほか、源氏ゆかりの寺院として足利氏が崇拝した園城寺には、足利氏が事あることに軍事的要衝「勢多橋」の警固を命じた古文書や、足利尊氏発願の「大藏経」などが伝来しており、これらにより足利將軍家の人々の足跡をたどります。ことに「大藏経」は、政権確立のために弟直義をも討伐した冷徹な武將尊氏が、反面に厚い信仰心をいだいていたことを示すものであり、内乱期を生きた武人の複雑な内面を示すものといえましょう。また、將軍家側近の実力者で、古い権威を否定した自由奔放な行動で知られた近江の武將・佐々木道誉の事績を、その画像や、多賀大社等に残る書状などで紹介。さらに、市内今堅田に墓が残る勾当内侍と後醍醐天皇方の武將新田義貞との別離と死のエピソードも紹介し、内乱期の歴史の歩みだけでなく、その時代に生きた人々の生き方や心情をもさぐる展示としたいと考えています。



重要文化財 絹本着色佐々木道誉像 勝楽寺蔵  
(写真 京都国立博物館提供)



重要文化財 紙本墨書陸波羅南北過去帳 蓮華寺蔵

●主な展示資料

○『太平記』（今川家本） 全三九冊の内、四冊  
（巻二・十五・二十・二十一、陽明文庫蔵）

陽明文庫蔵

○重要文化財「紙本墨書陸波羅南北過去帳」 一卷（蓮華寺蔵）

○重要文化財「紙本墨書大蔵経（足利尊氏願経）」  
全五九二帖の内六帖（園城寺蔵）

○国宝「東寺百合文書」の内、文和二年（二月二七日付）「足利尊氏御判御教書」 一通  
（京都府立総合資料館蔵）

○重要文化財「絹本着色佐々木道誉像」 一幅（勝楽寺蔵）

○紙本着色太平記絵巻（江戸時代）  
二巻の内、下巻（三時知恩寺蔵）

●観覧料

- 一 一般 四〇〇円（三二〇円）
- 高・大生 三〇〇円（二四〇円）
- 小・中生 二〇〇円（一六〇円）
- ※（一）内は、前売、団体（二十五名以上）、市内在住の六五歳以上の方・障害者の方の割引料金

●休館日

3 / 4・11・18・22

常設展示室2F「原始・古代」コーナーに  
石山寺蔵銅鐸の複製品を新たに展示

当館では、昨年八月に常設展示室の展示品について、大幅な展示替えを行いました。これからも、新資料が収集できれば、順次展示に反映していきたいと思っております。今回は、二階の「原始・古代」コーナーで、石山寺が所蔵する銅鐸（重要文化財）の複製品を新たに展示します。

この銅鐸は、江戸時代の文化三年（一八〇六）5月に、現在の天津市大平一丁目地先の水田から出土した、高さ90・9cmを測る立派なもので、天津市内で出土した銅鐸のうち、唯一現存する銅鐸として、天津地域の弥生時代を研究する上で貴重な資料となっています。この実物資料を常設展示で長期間展示することは保存等の面からできないため、当館で作成した複製品を展示することになりました。



石山寺蔵銅鐸複製品 本館蔵

## 第22回ミニ企画展

# 大津の仏教文化2

■平成14年1月22日(火)～2月24日(日)

院が応仁の乱時に疎開してできた新知恩院等の寺宝を中心に、仏像、仏画、經典など、重要文化財・重要美術品・大津市指定文化財8点を含む14点を展示予定です。その時代の代表的作例から隠れた名品まで、バラエティーあふれる古の表現をご覧ください。特に今回は、お釈迦様が入滅した場面を描く「ぶつねはんず仏涅槃図」を、写真パネルなどを使って分かりやすく展示する予定です。

大津市内に伝来す

る豊かな仏教美術の

中から、天台眞盛宗

総本山西教寺、西国

札所で有名な岩間山

正法寺、京都の知恩

重要文化財 木造阿彌陀如来坐像 安養寺蔵  
(写真 滋賀県教育委員会提供)



重要文化財 木造十一面観音立像 岩間山正法寺蔵  
(写真 大津市教育委員会提供)



重要文化財 木造地藏菩薩立像 岩間山正法寺蔵  
(写真 大津市教育委員会提供)



### ●関連講座

1月26日(土)

「近江湖南の仏像」

佐々木進氏

(栗東歴史民俗博物館

館長)

2月2日(土)

「仏像の道」

南都から近江へ」

寺島典人(本館学芸員)

## 第23回ミニ企画展

江戸時代の古文書1

### 大津町の自治

2月26日(火)～4月7日(日)

江戸時代の大津町には、鍛冶屋町や船頭町といった個別の町が一〇〇カ町あり、町ごとに、年寄・五人組と呼ばれる町役人が設定されていました。彼ら町役人は、町内住人の選挙によって選ばれ、代官所からの触書(法

令)を町内の人々に伝達したり、町内から代官所への訴えがあれば、その面倒を見るなど、町内のさまざまな出来事を処理していました。また、個別町ごとに「町定」と呼ばれる規約が、町内全員の総意によって審議、決定され、町内の運営に必要な経費の出納簿は「勘定帳」と題され、重要書類として大事に扱われてきました。さらに町内の絵図面作成にあたっては、全員が確認し、裏面に印鑑を捺すなど、全員の「合議」が重視されていたのです。

右の絵図も含めた町の重要書類は、年寄が交替するたびに、引き継ぎ書類を作成して、一点ずつ厳重に確認され、また虫干しも行われてきました。そして、町寄合と呼ばれる会議は、町内に設けられた「町会所」で行われていました。今回のミニ企画展では、右に記したような「自治」とも呼べる町人の活動の実態について、古文書や絵図を展示するなかで、分かりやすく紹介します。



元禄八年枳屋町絵図裏書 本館蔵 (枳屋町自治会寄贈)

## ●●●● 講座インフォメーション (3月) ●●●●

3月2日(出)	13:30から15:00	企画展関連講座	園城寺の尊氏願経について
○南北朝内乱の最中の文和3年(1354)、室町幕府初代將軍足利尊氏が、京都・鎌倉等の諸寺に命じて書写させ完成した「大藏経(だいぞうきょう)」の、成立事情や寄進のいきさつ等を紹介します。 講師：中森 洋(本館学芸員)			
3月9日(出)	10:00から11:30	第89回親子歴史講座	昔のおもちゃを作ろう!
○江戸時代のおもちゃを作ってみます。昔のおもちゃはどんな工夫と仕組で動いていたのでしょうか。作って確かめてみましょう。 講師：山崎和宏(本館学芸員)			
3月16日(出)	13:30から15:00	企画展関連講座	『太平記』を読むために —その構造・その言葉—
○『太平記』は、新時代を創るといふ、「夢」を語り、同時に、限らない退廃と崩壊についても語る。この作品全体の構造と、作品鑑賞の手掛りとなることばについて考える。 講師：笹川祥生(京都女子大学教授)			
3月23日(出)	13:30から15:00	ミニ企画展関連講座	大津町の自治
○江戸時代、大津町の町内規約や勘定帳、町年寄に関する古文書をもとに、大津町人の自治的な活動の全体像について紹介します。 講師：樋爪 修(本館学芸員)			

※諸般の事情により、内容が変更される場合があります。

※いずれの講座もハガキでお申込みください。

※参加証の発送は、講座申込み締切り(10日前)以降となります。

通知がない場合は、恐れ入りますが、博物館までお問い合わせください。

### 絹本着色仏涅槃図 ぶつねはんず 一幅

新知恩院蔵 本館保管  
南北朝時代（十四世紀）

本図をよく観ると、京都・長福寺本に図柄がよく似ていることに気づきます。特に下段中央に描かれている象、獅子、水牛の形勢、構成をはじめ、つがいに描かれている虎と豹、鹿などは型紙をそのまま使用したかのようにそっくりです。釈迦の周りにいる弟子や羅漢たちも、人数こそ違いますが、同じ表情、格好をした人を多く認めることが出来ます。長福寺本は、中国・南宋末の十三世紀中ごろ制作という説が強く、伝来以降、これを見本にした涅槃図が多く制作されています。新知恩院本もその一つといえますが、切利天から駆けつける摩耶夫人（左上）や食べ物を進呈する純陀（左中）、釈迦の足に触れる老婆など、説話的なモチーフを付け加えているところが本図の特色の一つといえます。新知恩院は応仁の乱時に京都の知恩院が現在の天津市伊香立に疎開して出来た寺院ですので、その伝来や、浄土宗とのかかわりなども、今後注目されるべきことといえます。

なお、本図をさらに写したと思われる十六世紀の涅槃図が、岩国徴古館に伝わっていて、これは本図の性格を考える上での興味深い作例といえます。

（寺島典人）



絹本着色仏涅槃図 新知恩院蔵



重要文化財 絹本着色仏涅槃図 京都・長福寺蔵  
（写真 京都国立博物館提供）

大津歴博だより No.45  
平成14年1月16日

大津市歴史博物館

〒520-0037 大津市御陵町2-2 ☎(077)521-2100  
ホームページ <http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp>